

「人はなぜ学ぶのか」

—— 人間の子は人間といえるか？ ——



「カエルの子はカエル」ということわざがある。カエルの子、つまりオタマジャクシは、カエルの子でありながら親であるカエルと形が違うし、陸の上では生きてはいけない。しかし、成長するにしたがって、しっぽがなくなり、足が生えてきて、陸の上でも水の中でも生きていけるカエルになる。カエルの子は、カエルの子として生まれることで、成長して何になるか、どんな生活をするかも決まってしまうのである。

それでは、「人間の子は人間」といえるのだろうか？

バングラディッシュでオオカミに育てられた二人の人間の子が発見された。オオカミにさらわれたのか、あるいは、捨てられていたのをオオカミが育てたのかわからないが、とにかく、発見されたときはオオカミの家族の一員になっていた。その子たちは発見されてから人間の社会に連れ戻され、年上がカマラ、年下がアマラという名をつけられた。そのとき、そのカマラが8歳半くらい、アマラが1歳半くらいであったらしい。その子たちは、スープを飲ませると犬のような格好で飲むし、いつでも四つんばいになって歩く。夜になれば毎晩決まった時間に必ず三度ずつ外に出て、遠くの森の方に向かって遠吠えをする。腐った肉を食べてもおなかをこわさないし、昼は明るいところを非常に嫌い、夜になると活動し始め、暗いところでも目が見えたと記録に残っている。また、人間の子が近づくと、歯をむき出して威嚇して脅す。人間を自分の仲間だとは思っていなかったようだ。人間の子なのにオオカミの習性を持っていたのである。なぜなのか。

人間の子の場合、一歳前後になると、一生懸命二本の足で立つ練習をする。立つことができるようになるまで、実にあらゆる機会に立とうとして努力する。そういった練習の積み重ねによって初めて、二本の足で立つことができるようになる。人間の社会の中で育てば、みんな二本の足で立っているから、自分も二本の足で立とうとするのである。親なども何とかして立たせようと励ます。赤ちゃんも、初めはものにつかまって立とうとするし、その次に、ものに伝って歩く練習をし、なんべんも手を出しては引っ込めながら、ちょっと離れた所まで移動する練習をする、といった具合にだんだん二本足で歩けるようになっていく。だから、その時期に人間の社会にいて人間に育てられれば、人間の子は、みんな練習をすることで立てるようになり、歩けるようになるのである。決してひとりでの歩けるようになるのではない。

ところが、カマラとアマラは手を前足のように使って、四つの足で歩いたり走ったりする練習をした。その練習をしなければ、オオカミの仲間としては生活できないから。だから、二人は人間の子として生まれたのだけれど、オオカミになる練習を一生懸命したのである。自分はオオカミの仲間だと思っているから、ニワトリなんかを盗みに行ったときに逃げ遅れたり、置いてきぼりを食ったりしたら大変なので、必死になって走る、そういうふうにと手と足で走る練習を非常にしたのだと思われる。

カマラの場合、二本足で立つのに六年ぐらいかかったという。立つ練習をするべき時期に練習をしないでしまったものだから、立つことがとても難しい仕事になってしまったのである。立つようになってからも、急ぐときや驚いたときなどはやっぱり四つ足で必死に走ったという。

コップで水を飲むという簡単なことでも、できるようになるまでにカマラは五年近くかかっている。手を手として使えなかったからである。

発見されてから一年足らずのうちに、アマラが死ぬ。カマラには死んだということがなかなか分からない。いくら揺すぶっても起きてこないの、とうとうベッドから引きずり出してしまった。そのうち育児院の人が気づいて死体を外に運び出してしまうと、その日は一日中飲むことも食うこともせず、辺りを嗅ぎ回って捜し回っていた。それから二十日の間、水以外何も口にしなかった。そして、もういなくなったことがとうとう分かったとき、カマラの両方の目から一粒ずつ涙がこぼれただけであった。悲しんでいたことはたしかであるが、オイオイ泣くこともせず、悲しいという表情もなかったという。

人間の子であっても、人間の社会で人間に育てられず、オオカミの仲間として生活し育っていくと、人間らしくなっていくかわりにオオカミらしくなっていく。人間の場合、人間として生まれただけでは人間らしい人間にはなれない。人間は、二本の足で立つことやコップやスプーンを使うことなど、人間になるために必要ないろいろなことを学ぶことによって自分のものにしていく。だから、人が悲しんでいるときには一緒に悲しみ、喜んでいるときには一緒に喜ぶといったことも、言葉や行儀作法のようなものも、人間の社会の中で生活しているうちにだんだん覚え、身につけていく。そうすることで人間の子は人間になっていく。人間にとって「学ぶ」ということはとても大切なのである。

他の動物には、生きていくのに必要な能力や働きは生まれながらに備わっており、成長するにしたがってひとりで（自然に）そういう能力や一種の技術が使えるようになる。しかし、人間の場合、生きていくのに必要な能力や働きで生まれつき備わっているものは、他の動物などに比べて非常に貧弱である。だから、貧弱な分、生きるために必要なものを学ぶことで身につけていく。学校で勉強することだけではなく、自分では気づいてないうちに、しょっちゅういろんなことを学んでいるのである。

人間の社会には、人間が生きるために必要なもので、歴史という長い時間を通してだんだんと作られ蓄えられてきたものがある。例えば、言葉や技術、考え方、道徳・しきたりやきまりなどがそうである。それを「社会的遺産」といい、それはその社会の共通の財産として後から生まれてきた人間が相続し、受け継いでいく、つまり、それらを学び、自分のものとすることによって人間らしい人間となっていく。逆に言えば、そういうものを学ばないと人間の化け物（村人たちはオオカミの群の中にいたころのカマラたちをそう呼んで怖がっていた）になってしまう。人間の社会で育っても、人間として本当に大切なものを学び、相続しないと人間の形はしていても、とうてい人間とは思えない人間になってしまう。人間になるためには、人間になるための勉強をしなければならないのである。

その社会的遺産を相続するときには、なんでもかんでも相続すればいいわけではない。そのうちから最も美しいもの、尊いもの、人間らしいものを選んで相続することが必要である。どういうものを選び、自分のものにする努力をするかによって、その人間の人格（人格や人間性）に響いてくる。人間にはそういう選択ができるし、どういう選択をするかによって、その人がどんな人間になるかが決まってくることになる。

（林 竹二「人間について」から引用）

この資料をよんだ感想を書きましょう。